

第 47 回日本分子生物学会年会 (MBSJ2024) 開催報告

2024 年 11 月に福岡で開催された第 47 回年会が無事に終了しました。ご参加、ご支援など大変ありがとうございました。

以前の年会長挨拶でもお知らせしていますが、この年会では特にキャッチフレーズは設けませんでした。開催方針として以下の 2 点を意識しました。

- ・あらゆる形態で多くの会員が参加・発表できる→対面とオンラインのハイブリッド形式を採用する
- ・広い分野の研究者と交流できる→小規模学会・研究会との共催シンポジウムを呼びかける
さらに、準備を進める段階で固まってきたこともいくつかあります。
- ・シンポジウムとポスターセッションを重視し、派手な企画は行わない
- ・科研費や学振特別研究員、海外ポスドクのための奨学金に関する企画を行う
- ・EMBO との連携により、EMBO-MBSJ ポスター賞を設け、ポスタークリニックを実施する
- ・オーストラリア生化学分子生物学会の共同シンポジウムを実施する
- ・座ることができる場所や電源を充実させる
- ・国際会議場とマリンメッセの移動時の風雨（防寒）対策を行う
- ・公開シンポジウムと高校生発表を行う
- ・企業展示を充実させる
- ・フォトコンテストを実施する

などです。

結果として、会期中は、ときおり強い雨風に見舞われ天候にはあまり恵まれなかったものの、参加者や企業協賛も多く、皆様には概ね満足いただけたのではないかと思います。本年会では、福岡や年会会場にいらながらもオンラインでシンポジウムに参加できるということが特徴でした。そのため、一部の会場で参加者が入りきらない場合でも別の場所でオンライン参加が可能となり、毎回問題となる会場のサイズと聴衆数のミスマッチを回避することができました。各シンポジウムがどのように各会場に割り当てられるのかについて疑問を持たれる方もおられるかもしれません。これについては、シンポジウムを公募する際に記載していただく予想される聴衆の数と過去の類似シンポジウムの参加者数を参考に決めました（会場で、係の方が参加人数をカウントされているのをお気づきの方も多と思います）。今回の年会では、各シンポジウムのオーガナイザーには実際の聴衆者数をお知らせしましたので、次のシンポジウムの企画の際にご参考いただけたと思っています。

分子生物学会は、規模が大きく基礎生物学・基礎生命科学で広い分野をカバーしていることが特徴であり、今回の年会でも、参加すれば自分の専門分野で深い議論ができつつも他の分野の話題に触れることもできるようなことを意識しました。そのため、プレナリー講演などを行わず、小規模の研究会・学会との共催を募り、ボトムアップの公募シンポジウムを会場が許す限り多く採用しました。年会を契機として新しい発想や共同研究の芽が生まれていけば嬉しい限りです。

研究費に関するシンポジウムは、永田恭介筑波大学長（国立大学協会会長）のお話をはじめとして非常に有用な議論が行われました。パネリストとして登壇いただいた先生方には厚く御礼申し上げます。また、市民公開講座は直前に登壇者の変更がありましたが、小林武彦さん（次期年会長）の臨機応変な司会と演者の素晴らしいお話により大好評で、終了後に高校生が列をなして演者に質問をしていました。高校生発表や公開シンポジウムなどを通じて社会との接点を増やしていくことは非常に重要であると思われました。

本年会では、ポスターディスカッサーの配置やショートトーク（サイエンスピッチ）は行わず、事前審査によるポスター賞を設けました。これは、限られたポスターセッションの時間の中で、落ち着いて十分に議論をしてほしいとの思いからです。ポスター賞に関しては、EMBO にもご協力いただきました。賞選考の審査員の方々に厚く御礼申し上げます。

会場に関して、今回は新しい展示場を使用することができ、3 日間での開催が可能となりました。若干駅やホテルからのアクセスが悪いということがありつつも、とても良い会場だったと個人的には思っています。会場には、地味に充電コーナーを設けたり、椅子の数を増やしたりしたのですが、まだ足りなかったかもしれません。また、国際会議場とマリンメッセの間の移動が寒いという問題は以前に参加したときに感じており、できるだけ風雨をしのげるようにしたいと思っていました。しかし、予想以上の強風でテントの一部が破損するなどのトラブルがありました。この点に関して、会議場の担当者ともご相談しましたので、次に福岡で開催される記念すべき第 50 回杉本年会（2027 年）には改善していることを期待します。

2025 年 2 月

第 47 回日本分子生物学会年会

年会長 木村 宏

(東京科学大学 総合研究院 細胞制御工学研究センター)